

紫式部の心：その二元論についての試論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横井, 孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008480

紫式部の心

——その二元論についての試論——

Murasaki-shikibu's Psychology

——A Sketch of her Dualism ("mi" and "kokoro")——

横井 孝

Takashi Yokoi

(平成7年10月2日受理)

まえがき

『紫式部日記』『紫式部集』によって紫式部論を試みる際、「身」と「心」の対語を通して論ずることはもはや常套になっているとおぼしい。阿部秋生氏が彼女(と『源氏物語』の明石の君)の「身のほど」意識を論じ、野村精一氏がこの対語をめぐって相当に掘り下げた議論を展開したことによって、この問題の基本的なルールはすでに鋪かれたと私には思われたが、各論者には取り組みやすい題材に見えるせいか、「身」と「心」について直接間接に触れる論は後を絶たないものの、『日記』の叙述を繰り返すにとどまっていた。

最近おおよけにされた山本淳子氏の「紫式部歌の白詩受容——「身」と「心」の連作をめぐって」(『國語國文』六四巻六号、一九九五・六)は、それまで触れられなかった、「身」と「心」の二元論の背景に『白氏文集』があり、対語の使用は「彼女のアイデンティティの一部」であり、「他者の目のない安全な場で自己を吐露した、自分だけのための典拠」であると指摘した。和歌の例ははやくに指摘済みだったが、新味も持たぬまま安直に論じられることが少なくなかった従前の段階から、これで一歩

抜きん出たと評せようか。しかし、ことは稿者自身にかかわって言いにくいことなのだが、私もまたかつて「身」と「心」の対語による思弁には白詩の「引用」があるであろうことを「比較文学的視点による紫式部論」(『静大國語』六号、一九九三・三)において論じたことがあった。しかも具合の悪いことに、山本氏が引く『平安初期における日本漢詩の比較文学的研究』(大修館書店、一九八八・一〇刊)の著者菅野禮行氏には職場を同じゅうして直接教示をいただいた関係にあり、前記拙稿にも菅野氏の所論は引いていたし、山本氏の指摘にかかる白詩も一部はすでに私に引いていたのである。いまさらこのような事実を声高にあげつらうのも大人げないが、拙稿掲載誌がサーキュレーションの悪いものであることと、いま一度掘り下げたい題材だったこともあって、改稿にとりかかろうとする矢先に山本氏論に接したのだった。よって本稿の原案は大幅に変更されざるをえなかったわけだが、前記拙稿もまたそれなりの役割を果たしおおせているかと判断し、屋上屋を架するの愚を避けることとした。もってかく付言した次第である。

ただ「身」と「心」の思弁について未開拓な分野が論じ残されているであろうことについては、いまだ試みたい問題がないわけではない。本

稿は旧稿を承けながらも、別の視点で「身」と「心」の対話による内的世界に分け入ってみたい。

一 「心」の復顔術

ひととしての紫式部を論ずる時、『紫式部日記』『紫式部集』における自己への言及は、単なる伝記的資料として以上に、憂愁・孤絶感を感じださせる人物像把握のために使い勝手のよい記述としてしばしば引用される。殊に『日記』の場合は、前欠説をめぐる成立論と女房日記としての記録性に関する論議を除けば、ほとんどの論考は紫式部の自己省察の筆先に終始しているといっても過言ではないはずだ。もはや手垢が過ぎすぎたと言えなくもない文章だが、それらと再会することから始めざるをえない。

〔紫式部日記〕

行幸ちかくなりぬとて、このうちをいよ／＼つくりみがくせたまふ。世におもしろき菊のねをたづねつゝほりてまるる。色／＼うつろひたるも、きなるが見どころあるも、さまざまにうへたてたるも、あさ霧のたえまに見わたしたるは、げにおひもしぞきぬべき心ちするに、なぞや、まして、おもふことのなめなる身（心）ならましかば、すぎぐしくももてなし、わかやぎて、つねなき世をもすぐしてまし、めでたきこと・おもしろきことを見きくにつけても、たゞ思ひかけたりし心のひくかたのみつよくて、ものうく、おもはずに、なげかしきことのまさるぞ、いとくるしき。いまはなを物わすれしなん、思ひかひもなし、つみもふかくなるなど、あげたてばうちながめて、水鳥どものおもふことなげにあそびあへるをみる。

水とりをみづのうへとやよそにみんわれもうきたる世をすぐし

つゝ

かれも、さこそ心をやりてあそぶとみゆれど、身はいとくるしかんなりとおもひよそへらる。…

（書院部蔵黒川本『紫日記』。二九—三〇頁・岩波文庫

相当頁を示す。*箇所「事…」を諸本により訂す）

〔紫式部集〕

身をおもはずなりとなげくことの、やう／＼なめに、ひたぶるのさまなるをおもひける

55 かずならぬころに身をばまかせねど身にしたがふは心なりけり

56 こころだにいかなる身にかかなむらむおもひしれどもおもひしられず

はじめてうちわたりをみるにも、ものあはれなれば

57 身のうきはころのうちにしたひきていまこころのへぞおもひみだるゝ

（実践女子大学図書館蔵本『むらさき式部集』）

これらには「思ひかけたりし心」「身をおもはずなり」など、濃厚な憂愁に彩られた紫式部像の定型化を促す文例として好適な表現が好都合に盛り込まれていた。一方の『紫式部日記』にも同趣の記述が散りばめられ、他方の『紫式部集』には例の「身」と「心」の典型的な二元論が図式化される。かてて加えて、言わずと知れた大作『源氏物語』が背後に控えている。思わず論者が腕を撫したくなるような材料が揃っているではないか。かつて學燈社『國文學』の特集号（二三卷九号、一九七八・三）で紫式部論と和泉式部論の競演が行われた折、中野幸一氏「紫式部と「うし」、野村精一氏「身」と「心」の相克——劈かれたる存在について」、藤井貞和氏「紫式部、時間意識」、高橋亨氏「紫式部、自己省察の文体」など、所掲の紫女專論の『日記』『集』引用箇所がほとんど同じであっ

たことは理由のないことではない。使い勝手のよさを称するゆえんである。

しかし、材料が揃っていて好都合に見えることが論述を正しい方向に導くか否かについては、また別の問題と考へなければなるまい。むしろ「揃った材料」のためにわれわれの思考に枠が填められることも少なくないのではないか。——言い換えれば、発想と材料が短絡されてしまいかねない、という虞れなしとしない。「身」と「心」という融通無碍の概念を透過して捉えた像は、検証の方法とその模索なしには、憶測や評論の範囲に留まるしかないと思える。

たとえば、右に引いた『日記』、

……めでたきこと・おもしろきことを見きくにつけても、たゞ思ひかけたりし心のひくかたのみつよくてもものうく、おもはずに、なげかしきことのまさるぞ、いとくるしき。……

の一節の中の「思ひかけたりし心」をめぐる議論をみてみよう。諸注を見るに、「是則出家の望をいへり」（足利種直『解』）、「仏道に深くおもひいたりし心なり」（藤井高尙・清水宣昭『釈』）などの古注をはじめ、その継承としての、

「遁世を思ひ立ちながら、其のかひなく、思ふに任せぬを、仏に對して罪深しとなり」（関根正直『精解』一九三三年五月）

「出家遁世しようと思ふ心」（阿倍秋生『評註紫式部日記全釈』一九四九年一〇月）

「かねがね願つてゐる出家の志」（玉井幸助『朝日・全書』一九五二年六月）

「出家の志」（曾沢太吉・森重敏『武蔵野書院・新釈』一九六四年二月）

「出家遁世を思う心」（中野幸一『小学館・全集』一九七一年六月、『小学館・

新編全集』一九九四年九月）

「官仕えする以前の紫式部の心事の最も大きな部分を占めていたの

は出家遁世の願いであった」（萩谷朴『角川・全注釈』一九七二年一月）など一貫した解釈とともに、出離説を留保する、

「思いつめた憂愁から逃れられぬという面……出家の願と決めてしまふ通説はとれない」（池田亀鑑・秋山虔『岩波・旧大系』一九五八年九月）

「出家の思いと限定はできない。嘆かわしい身の上について物思いが深いゆえに、その物思ひから離れたいとの思いだったかと思われ」（山本利達『新潮・集成』一九八〇年二月）

という諸註、さらに『全注釈』の部分修正ともいうべき、

「夫宣孝に先立たれて後、未亡人として出家せねばならないという常識的な建前」（萩谷朴『新典社・校注』一九八五年一月）

という解釈など、出離への志向を含めた憂愁感を読み取る解釈が定説化していた。が、「式部は現実には満足しえず、身をもってこうしたままならぬ現実の苦悩——現実と理想との矛盾にさいなまれていた……この現実的な苦悩、いうなれば浮世なみの煩惱が、この日頃来の「思ひかけたりし心」であると思う」と一旦認めながら、結局は「釈」以来の旧説に捉われていた池田亀鑑氏の未完の考証稿『紫式部日記』（至文堂、一九六七年六月刊）を先駆としたであろう見解が出された。「高貴な男性の寵を受ける」という「少女時代からの夢」と解した石川徹氏「紫式部日記管見——「思ひかけたりし心」をめぐる」（『平安時代物語文学論』笠間書院、一九七九・四刊、所収。初出一九七二年）である。これに拠って「高い家門意識と結婚の夢」を読み取るようにする前掲藤井貞和論（紫式部、時間意識）などが出現し、それらを承けたためであろう、近年の注に、「……たりし」とあるので既往に根ざした宿望ともいうべきものであろう。出家の志に限定して解する説が多いが、現実化の困難な宿願の総体をさすものにとりたいたい」（伊藤博『岩波・新大系』一九八九年一月）との解が盛り込まれるようになった。今後の論議はこの注あたりが一つの基準となることが予測

される。その石川論文の要諦は、

……紫式部のこの「思ひかけたりし心」——昔からの念願とは、何であつたのだろうか。源氏物語完成の意志ではないであろう。彼女にとつて……「思ひかけたりし」念願が叶えられないが故の代償行為であつたに違いないから、この念願が彼女の心中に生じたのは、源氏物語起稿以前の若かりし頃であつたと思われる。……彼女の家系を遡れば、天皇の女御・更衣となつた女性もあり、師輔・兼家・道隆などはそれぞれ受領貴族の娘を妻に迎えているのであつて、少女時代の紫式部は、おそらく天皇や皇太子ほどでなくても、親王や一世の源氏のような高貴な男性の寵を受けることか、または人臣でも権門高家の室に入ることを望んでいたであろう。……

(石川氏前掲書、四二二頁)

というのにはほとんど尽きてしまふ。たしかに鋭い洞察力といふべきであり、納得させられる向きもあろう。けれども、「心」といふ不定型な、しかも「思ひかけたりし」としか言わないものを相手にする議論として、筆者の伝記的事実と連結するのあまりに性急・短絡ではないか。「……に違いないから」といふ叙述、検証もないまま紫式部の内奥を推断する論理展開には、洞察力に対する敬意とともに、押しつけがましきさ(あるいは独断)をもおぼえるのである。この石川説を「かみしめたい」といふ表現で賛意を表す藤井氏は、「思ひかく」の語義を『岩波古語辞典』を引きつつ「予想」の意と捉え、そこから「将来についての望みや期待」に転じて石川論にリンクさせる。しかしどのような理屈をこねまわそうが、「思ひかく」を「将来についての望みや期待」(傍線引用者)に拡大解釈し、さらに「少女時代の紫式部(が)……権門高家の室に入ることを望んでいた」という意見に置き換えるのは飛躍が大き過ぎる。古語辞典の記載を「①……②……」と引いて、②の方がよいかどうかなどと思ひ悩む

ところは学生のレポートを読むようではほえましいが、前後の高踏な意見との落差にとまどわざるをえない。それもこれも結論が先にあればこそその意味ころがしに他ならないからなのである。

にもかかわらず、藤井氏などに石川説が魅力ある見解として映るのは、石川氏が長年培つた文学観、人間理解による洞察がなされているからなのではあるまいか。洞察である以上、それは本来証明困難なものであり、当否を判断する場にはなじまない問題なのかもしれない。しかし、「心」といふ不可視な領域であるが故に、上引のような石川説であれ、『岩波・新大系』の脚注(「現実化の困難な宿願の総体」)であれ、大胆な憶測によらぬかぎり、ひととしての紫式部にアプローチできぬものなのかどうか。洞察力も文学観・人間理解もいまだしな私の場合、紫式部の「心」の世界に分け入るためには、まず普遍的な問題を凝視するところから始めなければならぬ。

紫式部の人間像をまるごと再現する力技は至難といふ他ないし、その心の中の世界は彼女の肉体とともに滅び去つた。研究を志す人間の言うべきことではないが、不可知・不可視の限界があることは認めねばなるまい。魅力ある洞察といえども、洞察であるがゆえの論理の跳躍が存するのだ。「彼女がその夢を捨ててというより、大幅に切り下げて、山城守藤原宣孝との結婚に踏み切つた」「宣孝没後、宮仕に出てまもない頃、まだ彼女がその「思ひかけたりし心」の夢を叶えてくれそうな理想の男性の出現を心ひそかに求めていた」(石川氏前掲書、四二三・五頁)という人物理解が仮に正鵠を射たものであつたとしても、我々はすでにひとの心というものが裏も表もある複雑不定型のものであることを知つてゐるし、心のうちを文字に載せることができたとしても、それは矮小化された虚像に過ぎないことも経験則として承知してゐるはずなのだ。

「思ひかけたりし」に伝記的事項をはめ込む前に、「……たりし心」

の方を知る手続きが必要なのではないだろうか。益田勝美氏は『日記』において「作者の選びとった表現を見極めるために」、紫式部の近辺に資料がなければ、あらゆる手段を尽くして「ひとつの生活慣習、ひとつの儀式・行事の具体例をまるごとそこで復原し、模型的なものを作る」ことに留意しているといい、それを「通時的模型の復原」と称した(益田勝美氏)『紫式部日記』考証の方法——通時的模型の復原ということ、『日本文学』二巻二号、一九七三・二)。私はここで益田氏の擧げに倣って、人間の内面を模型化することによって紫式部の「心」のかたちの復原を試みたい。紫式部が偉大な作者であることはひとまず置いて、人間として普遍的に共有する部分から「心」の顔を抜き出し、通時的ならぬ共時的模型を造ってみようということなのである。もって不可視のものを可視化するための方法とすることにしたのである。

二 「心」の所在

『紫式部日記』の総体をどのように評価するにせよ、紫式部の人間を語る記録たることには変わりないはずであり、彼女の閉ざされた「心」の世界を読みひらくためには、とりあえず従来の手がかりの検証から始める必要がある。山本利達氏は、『日記』の主題を中宮彰子御産を記録するにありとし、「作者の愁いにみちた心の描写は、作者の目と心を位置づけると共に、中宮や儀式の立派さを引き立てる役割をもったもの」(山本『集成』解説、一八五頁)と説いた。その可否についてはしばらく措くとしても、「作者の愁いにみちた心の描写」といい、「作者の目と心」といい、紫式部の「身」と「心」を語る、従来引かれることの多かった例文のあれこれに傾聴した上での発言である。手垢がつきすぎているはいても、紫式部の「心」を読みひらくためには、やはりここから出発する他

ない。

前節に引いた例(「行幸ちかくなりぬとて……」の章、本稿二頁)をその①として、「身」と「心」とが同時に語られる記述を拾い上げてみよう。寛弘五年十一月二日条、五節の舞姫御覧の日、昼日中衆目にさらされる童女の姿を眼にして、

②……たゞかくこもりなきひる中に……そこらのきんだちのたちまじりたるに、さてもありぬべき身のほど・心もちるといひながら、人にをとらじとあらそふこゝちもいかにをくすらんと、あひなくかたはらいたきぞ、かたくなしきや。(五二―五三頁)

と記す中の「身のほど・心もちる」は童女達を付度する詞だが、紫式部がそれを念頭においているからこそ、眼前の事態に直結して表出されてしまふ、と読むべきだろう。萩谷『全注釈』は「その場の人物として、眼前の現実に入念することなく、その場の現象に触発されて、我が身の上や心情を内省する方向に反転し、沈潜してゆくのを常としていた。従前も……(一六章段の番々、省略)……の各節において、程度の差こそあれ、そうした回帰的内省の傾向が認められた」とする。だから、右の記述の後、紫式部の筆は他者たる舞姫の姿からたちまちに自己へと反転する。

③……われらを、「かれ(舞姫達)がやうにいていであよ」とあらば、又さても御まよひありくばかりぞかし。かうまで立いでんとはおもひかけきやは。されど、めにみすくあさましきものは人のこゝろなりければ、「今より後のおもなさは、たゞなれになれすぎ、ひたおもてに……ならむもやすしかし」と、身のありさまのゆめのやうにおもひつゞけられて、あるまじきことにさへ思ひかゝりてゆゝしくおぼゆれば、めとまる事も、れいの、なかりけり。

(五三―五四頁。*底本「ならむやすくかし」、諸本により補訂)

ひとは他者の内面を推測することはできても、それが他者と同一であ

るかは保証のかぎりではない。他人の付度が所詮は自己の鏡像に過ぎないことを理解すれば、「人のこゝろ」が紫式部自身の「心」でもあることは火を見るよりも明らかだ。自ら性格を省みて「かうまで立いでん」と予測できなかったものが、「面無」きまでに「なれになれすぎ」た今の「身のありさま」に驚いているのである。この変身と変心には「あるまじき」「ゆゝしく」と否定の語が並べられ苦渋の色濃いのが、本稿冒頭の例文(④)にあった、水鳥に我が身を擬した「心をやりてあそぶとみゆれど、身はいとくるしかんなり」と同一地平にあると見なすことができよう。

次例を見よう。消息文中、清少納言の人物評の後に続く一節に、
 ④かくかた／＼につけて、一ふしのおもひいでらるべきことなくて、
 すぐし侍ぬる人の、ことにゆくすゑのたのみもなきこそ、なぐさめ
 思ふかたゞに侍らねど、心すごうもてなす身ぞとだにおもひ侍らじ。
 その心なをうせぬにや、物思ひまさる秋の夜も、はしにいであてな
 がめば、いとゞ月やいにしへほめてけん、みえたるありさまを、
 もよをすやうに侍べし、世の人のいむといひ侍とがをもかならずわ
 たり侍なんととはゞかられて、すこしおくにひき入てぞ、さすがに心
 のうちにはつきせずおもひつゞけられ侍。
 (七四頁)

とある傍線部の前者「心すごうもてなす身」には、遡って阿部『評註・全釈』が「いつさいの係累を一思ひに捨てて深山に入つて仏の修行をするといふやうな極端なこと」と解しており、萩谷『全注釈』は当該箇所を「『心すごうもてなす身ぞとだに思ひ侍らじ』の心なほ失せぬ…」と校訂し、「…なをうせぬにや」と「その心」の生起に「時間の経過」のあることを指摘している。曾沢・森重『新釈』は本稿冒頭の引文(①)の「思ひかけたりし心」前後の文脈に通ずる心境と説いてもいる。「思ひかけたりし心」の解釈の再確認させるとともに、「心」と「身」とが対応

する上での心的機構をますますゆかしいものに覚えさせる例ではないか。次に、やはり消息文の、これは結尾の「御ふみにえかきつゞけ侍らぬことを、よきもあしきも、世にあること身のうへのうれへにても、のこらずきこえさせをかまほしう…」とある一節のさらに最末尾、読者(特定の?)への断り書に、

⑤……御らんじては、とうたまはらん。えよみ侍らぬ所／＼、もじおとしぞ侍らん。それはなにかは、御らんじも／＼らせ給へかし。かく世の人ごとうへをおもひ／＼、はてにとぢめ侍れば、身を思ひすてぬ心のさもふかう侍べきかな。……(な)せんとにか侍らん。

(八一～八二頁。*底本「…さん」とある。「身を思ひすてぬ心」には、本稿冒頭に掲げた『集』の「かすならぬこゝろに身をばまかせねど身にしたがふは心なりけり」「こゝろだにいかなる身にかかならむおもしれどもおもひしられず」(55・56)の記憶を、単なる相似以上に喚起する力があるように思われる。諸注大きな異同はないが、萩谷『全注釈』が最も詳細に解説を加えていて参照すべきである。

これは直ちに、第七二節に見えた「世のいとほしきことは、すべて露ばかり心もとまらずなりにて侍れば、聖にならむに、懈怠すべうも侍らず」とあったことと矛盾する。紫式部のように人生について多くの意見を有する問題意識の強い人間が、そうそう簡単に遁世し得るはずはないのである。彼女は、テーゼに対して無限にアンチテーゼを思いつく性質で、究極的に止揚すべき所を知らないからである。第七二節(横井注、「いかに、いまはこといみしはべらじ…」の一節を指す)における四段論法の屈折の多い思考方法、すべてが『未練』そのものであり、『煩惱』それ自体である。

——と。私に傍線を施した部分に注目して戴きたい。「身を思ひすてぬ心」の語に象徴された「身」と「心」の相克があらためて問題点として浮上してくるのである。

『紫式部日記』による紫式部像把握は、右の山本利達氏の「作者の愁いにみちた心」(『集成』)、あるいは室伏信助氏の言い換えた「憂愁にみちた作者の心」(『紫式部日記／主題の形成』、別冊國文學『王朝女流日記必携』學燈社、一九八六・一)に集約されてしまう。まことにシンプルなものである。言葉尽くして迂回しようにも結局ここに収斂してしまふ——というのも、端的に彼女自身が「身のうれへ」を語っているからだ。「憂愁にみちた心」を産み出す「身」のおき所・あり方は、既に彼女自身によって意識されつづけていたのである。いままで幾たびも引かれているが、『日記』の叙述の埒外に出ぬよう、あらためて検討し直してみよう。

著名な冒頭に続く一文、——

⑥(中宮の)御ありさまなどのいとさらなることなれど、うき世のなぐさめには、かゝる御まへをこそたづねまいるべかりけれど、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづわすらるるにも、かつはあやし。(七頁)

と、早くも「うき世」への認識が露出しており、ここでは「うき世」と観する彼女の現在の抛り所が「うつし心」の解釈如何に関わることが知られる。藤井高尚・清水宣昭『釈』は「『うつし心』は、現心にて、いま我心の底に、おぼろげならず深く思ひとりたる心をいふ。『ひきたがへ云々』とは、後々にもかゝる心ばへあまた見えて、この式部が心、たゞ仏の道に思ひいらりたるうつし心を引いたがへて、御まへなるほどは、御ありさまなどのすぐれさせ給へるによりて、よろづうきこともわすられぬとなり」と解し、以下の諸注はおおむねこの注記の範囲を出ない。

しかし、式部の半生を安易にここに代入することを排除する限り、開

巻冒頭のこの一文では「うつし心」が「仏の道に思ひいらりたる」こととはまだ明瞭ではない。伊藤『岩波・新大系』のように「現し心」は……自他を醒めた目で見つめる平常の心のありよう」とあるのも、諸資料による式部像についての前提があった上での発言に他ならない。あるいは池田『考証』(『紫式部日記』至文堂刊)の「現心」即ち「菩提心」とは断じ去る根拠とはなし難い……日頃この世をば憂き世とあきらめつつ、しかも一たび中宮の御前に参つては、その恒の心に違ひ、いつしか万の憂きことをも忘れ、この世に生くる希望すら出で来るのは如何なる事かと、我れと我が矛盾に「あやし」と云ったのではあるまいか」とあるごときを言い換えたものと見える。右のように引かれる機会の多い箇所は、前提・先入主を去って取り組まないかぎり、同じ叙述の繰り返しに過ぎなくなるだろう。ただし、中野『小学館・全集』『新編全集』は「自分の矛盾した心」という繰り返しの後に「現象にそのまま従う心情と本質を見とおす理性との共存は、式部の精神構造の一つの特性」と敷衍したのには、「心情」「理性」の用語はやや疑問だが、「身」と「心」の二元論を視程にとらえて、しばらく拘泥すべきであろう。

次も著名な一章。

⑦御まへの池に水鳥どもの日々におほくなり行を見つゝ、「いらせ給はぬさまに雪ふらなん。この御まへのありさま、いかにをかかしからむ」と思に、あからさまにまかでたる程、二日はかりありても雪はふるものか。見どころもなきふるさとの木だちをみるにも、^(a)物むつかしう思みだれて、としごろつれづれにながめあかしくらつゝ、花鳥の色をもねをも、春秋に行かふ空の気しき・月の影・霜・ゆきを見て、「そのとききにけり」とばかり思ひわきつゝ、^(b)「いかにやいかに」とばかり、ゆく末の心ぼそさはやる方なき物から、^(c)はかなきものがたりなどにつけてうちかたらふ人、をなじ心な

るは、あはれにかきかはし、すこし氣どをきたよりどもを、たづねてもいひけるを、たゞこれをさま／＼にあへしらひ、^(d)そゞろごとにつれ／＼をばなぐさめつゝ、世にあるべき人数とはおもはずながら、さしあたりて、「はづかし、いみじ」と思ひしるかたばかりのがれたりしを、^(e)さまのこることなくおもひしる身のうさかな。

心みに物がたりをとりてみれども、見しやうにもおぼえず。^(f)あさましくあはれなりし人のかたらひしあたりも、「我を、いかにおもなく心あさき物と思ひをとすらむ」とおしはかるに、それさへいとはづかしくて、えおとづれやらす。心にくからむと思ひたる人は、「おほぞうにては、文やちらすらん」などうたがはるべかめれば、いかでかは^(g)我心のうち・あるさまをもふかうをしはからんと、ことはりにて、いとあいなければ、中たゆとなけれど、をのづからかきたゆるもあまた、「すみさだまらずなりたり」とも思ひやりつゝ、おとなひくる人もかたうなどしつゝ、すべてはかなきことにふれても、あらぬ世にきたる心ちぞ、こゝにてしもうちまさり、物あはれなりける。

(四四―四六頁)

長い引用だが、公的記録が一段落したところで、式部自身がはじめて自らの「心」を詳述する場面なのであり、端折るわけにはゆかないのだ。阿部『評註・全釈』は「通釈もしくい一段である。作者の心の移り変りを、そのまゝ言葉にしたもの」と説く。しかし、「身」も「心」も(つまり^(g)「我心のうち・あるさま」を)語るべきものは語っているのではあるまいか。

彼女の(a)「物むつかしう思みだれ」る淵源は不明ながらも、「つれ／＼にながめあかす」ことは年来におよぶもの、(d)「そゞろごとにつれ／＼をばなぐさめ」ているという。その「そゞろごと」の第一が(c)「はかなき物語」であり、(f)「あさましくあはれなりし人のかたらひ」

もそれであったともいう。かの著名な物語作者でもある彼女に「物語」への関心を相対化せしめる「心」を生み出したのが「身」なのだ、という文脈なのであろう。

(b)「ゆく末の心ぼそさ」を語るに「いかにやいかに」というのは、関根『精解』以来指摘のあるように、『拾遺集』巻八(雑上)の、

題しらず

よみ人しらず

507世の中をかくいひいひのはてはてはいかにやいかにならむとすらん

(『新編国歌大観』勅撰集編)

を引いている。引歌の表現効果については近年の成果が蓄積されているので贅言を要しないかもしれないが、念のために申さば、引用とは「過去の作品の断片を自己の作品に挿入することによって表現性を豊かにし、あわせてイメージをグブらせ奥深い内容にしようとする方法」⁽¹⁾であり、また「引用論とはことばの響きあいを含みつくすことであり、また引用とは反復の謂にはかならない。そして、その引用による反復は二つの部分を構造化し、そこに何がしかの主題的つながりを生じさせる」⁽²⁾ともいわれる、作者の積極的な方法であるらしい。いわば「心」の器である「身」の「ゆく末の心ぼそさ」が、引歌という「引用」で語られている事実注目したい。まえがきに記したように、「身」と「心」の二元論にも「引用」の方法が駆使されていたからである。

前述したとおり、ここでは白詩による紫式部の内面表出の意義については触れない。触れはしないが、作者による純粹な自己分析と思われる「身」と「心」の二元論に「典拠」があったという事実は、従前のように、例えば『紫式部日記』を論ずるのに『紫式部日記』しか引用しないというふうな論の立て方では、問題の実相は見えてこないという現実について、旧稿が指摘しえていたのではないか、ということだけは示しておきたい。まして、不可視な「心」の話題である。心理的世界へ分

け入る方法は、単なる『紫式部日記』（あるいは『紫式部集』）本文の解釈だけでは限界があることに、われわれはどうに気付いているべきであった。

三 「心」の構造

骨格から生体としての顔を復原することができるという。復顔術である。それと同じように、『紫式部日記』や『紫式部集』という骨組みの上に人間一般の心理の動きを肉付けし構造化して、紫式部の「心」を立体化することはできないだろうか。

紫式部に対する心理学的方法の応用には、はやく神田秀夫・石川春江両氏による『紫式部——その生活と心理』（角川書店、一九五六・二刊）が先鞭をつけていた。ここでは主に『紫式部日記』を用いて宮廷生活の様態を分析し、それを前提として彼女の「非社交的」「自己意識の過敏」「孤独」「自閉的」等々の性格を読み取り、次のように概観した。

式部は分離性気質の特徴を多く持っている……式部の性格を紫式部日記によって一応顔面どおりにとるならば、非常に繊細な神経、ひっこみ思案と思われるかもしれない。だが総合した人間像を描いてみると、出処進退をよくわきまえた、思慮深い、そして自信もあり皮肉なところもある、利巧な常識的な婦人像が浮かびあがってくるのである。

だが個々の特徴を見る時、先にあげた分離性気質のいくつかの徴候となんとびったり合うことであろう。式部の生来的な気質というもの、彼女の性格の底にあるものは、多分に分離性的な気質であると思われる。

（一八六—一八七頁）

興味深い指摘とはいえ、文字どおりの概観である。これ自体が言説と

しては十分に抑制がきいたものとなっているが、さらに右に引用した文の直後に「分離性気質といっても、これも程度の問題」と保留の態度をとる。これも両氏が抛り所としたのがクレッチマー (E. Kretschmer) の体格による性格類型論のレベルでしかなかったことが、主張に説得力を持たせなかったのであろうし、両氏もその限界を承知していたがために自らの指摘に抑制をくわえざるを得なかった。後の研究史展望に、岡一男氏「『源氏物語』の心理描写——精神分析学的考察」(『源氏物語事典』春秋社、所収)と神田・石川両氏の試みを「心理学精神分析学の応用」と呼んで「心理学が文学作品を資料としうるものがあっても、文学が心理学によって理解されることはなく、限界のある方法と思われる」(池田和臣氏「研究史と研究書解題」、別冊國文學『源氏物語必携』學燈社、一九七八・二二)と紹介した。その当時の国文学者が参照しうる精神病理学のレベルからみれば首肯せざるをえないが、将来と可能性に向けて、果たしてその「予言」は正しいだろうか。私には「食わず嫌い」「我が仏尊し」と見えるのだが。

近年は、われわれのような非専門の人間の周辺にも精神病理学にかかわる文献は読みやすいかたちで公開されるようになった。なかでも R・D・レイン (R. D. Laing) の『ひき裂かれた自己——分裂病と分裂病質の実存的研究』(原著一九六〇刊。阪本健一・志貴春彦・笠原嘉二共訳、みすず書房、一九七二・九刊)は、古典的名著としても斯界の教科書的存在としても、つとにわれわれの知るところとなっている。サブタイトルにも明示されているとおり、神田・石川両氏が問題とした分裂病質に対して、その著書の劈頭からメスが入る。

〔a〕

精神分裂病質者 (schizoid) というのは、その人の体験の全体が、主として次のような二つの仕方で裂けている人間のことである。つま

り第一に世界とのあいだに断層が、第二に自分自身とのあいだに亀裂が生じているのである。このような人間は、他者と（ともに）^{ツゲザイ}ある存在として生きることができないし、世界のなかで（くつろぐ）^{アト・キム・イン}こともできない。それどころか、絶望的な孤独と孤立の中で自分を体験する。その上、自分自身をひとりの完全な人間としてではなく、さまざまな仕方（分裂）^{フリット}したものとして体験する。たとえば身体との結びつきが多少ともゆるくなった精神として、あるいはまた、二つ以上の自分として——等々。

（二五頁）

これは「精神分裂病質者」を一般化した定義の叙述に過ぎないが、神田・石川両氏が前掲著『紫式部』で言わんとしたこととの共通性——というよりも抑制したフィールドへの踏み込みを予感させる一文ではないだろうか。ここだけですでに「自分自身を……〈分裂〉したものとして体験する」「身体との結びつきが多少ともゆるくなった精神」「二つ以上の自分」という興味深い指摘がある。「身」と「心」の二元論へのアプローチを考えるのにふさわしいものであろう。

歌人でありかつ医師でもあった上田三四二氏は『うつしみ——この内なる自然』（平凡社、一九七八・二刊）において、レインの一文に敷衍して、

〔a-2〕

さて、分裂病質者にとって、世界は荒涼としている。のみならず、敵意にみちている。自然はよそよそしく、拒絶的に、おびやかしをともなうて彼をとり囲み、社会∥他者は冷笑的に、意味ありげに、目配せをして彼を陥れようとしている。そこは暖かさというものがすこしもなく、彼の心はごえそうで、絶えず不安にさらされている。彼は世界のなかで「くつろぐ」ことが出来ない。自然には拒まれ、他者と「ともに」あることから隔てられ、要するに彼は世界

から疎外され、迫害されていると感じている。……

（二四九頁。引用は平凡社ライブラリー版（一九九四・二刊）による）

という。レインのものよりもさらに模型化し誇張した文章であるために、あるモデル——端的には紫式部ということになるが——を念頭において読むと違和感がある。しかし、そのモデル自体が、既存の評伝や論考などの解釈によってある前提なり先入主なりを負ってモニタージュされたものであるだけに、違和感が正当なものであるかどうかは議論の余地があるだろう。

例えば、『紫式部日記』の最初の詠、

をみなへしさかりの色をみるからにつゆのわきける身こそしらるれ

（九頁）

と右の二引用文と読みくらべてみたらどうだろうか。上句の状況から排除されていることを思い知らされる「身」という下句。——もちろん文脈は、庭の手入れをさせる土御門殿のあるじ道長が、わざわざ歩を運んで女郎花を差し入れる場面であり、主家に懇ろにされている紫式部の実感をあらわにしたものではある。しかし挨拶の謙辞であるにしても、ことばとして表現されたものはまさに右のとおり状況であることはたしかなのだ。そもそも「身」といい「心」といい、ひき裂かれた自己を紫式部自身が語っていたのであったし、前掲中野『小学館・全集』のように「現象にそのまま従う心情と本質を見とおす理性との共存は、式部の精神構造の一つの特性」と分析したのでありながら、「式部の精神構造」自体の解明に踏み込まなかったのはなぜなのだろうか。国文畑では「精神構造」の用語には曇惑的なひびきがあって、そう言ってしまうと何かを指摘したような気になる癖が一樣にあるのではないかと私は邪推している。せっかくの「心理学精神分析学の応用」の試みが立ち往生しているのも、そのあたりに事情があるだろうか。

さらにレインはいう。

〔b〕

人は誰でも（もつとも身体化されることのない人でさえ）、自分を身体と（あるいは身体の中に）わかちがたく結びつけられているものとして体験する。日常の環境では、身体が生きて実在的、実体的であると感ずる度合に依りて、人は自己を生きた実在的な実体的なものと感ずる。多くの人びとは身体が始まるとき自分が始まり、身体が死滅するとき自分が終ると考へる。このような人は、自己を身体化されたものと体験している、ということが出来る。

しかしつねにそうだというわけではない。〈ふつうの〉人でも緊急のストレスのある時には自分の身体から自分が部分的に遊離したと感ずることがあるものだが、それとは全くちがって、そもそも自分の生が身体に吸着されておらず、むしろ自分自身が（以前からずっとそうであったわけであるが）自分の身体からいくぶん離れた存在であるという人びとがいる。このような人のことをひととは、〈彼は〉全く受肉するにいたっていないといつてもよく、また彼は自分自身のことを多少とも身体化されない存在だと表現してもよい。

（八三〜八四頁）

と。文中「身体」すなわち「身」と読みかえるとしても、直接「心」に相当する語を見出しがたい。が、上田氏は、カタレプシーの患者に接した経験を述べた後、右のレインの文を引いて、紫式部の「身」と「心」にリンクさせるにふさわしい言い換えを試みせる。

〔b-2〕

ここに言う「自己」は、これまでの文脈からは「精神」と呼んだ方が適切で、統一がとれる。したがって私はレインの表現を借りつつそれをやや修飾して「身体化された精神」「身体化されない精神」

と呼ぶことにするが、分裂病質者には、彼の精神がうまく身体の中に根付いていないとする感がある。身体は精神にとって、何かなじみがない奇妙な存在と感ずられるのだ。普通の人間においては精神は身体と折り合いがついている。精神は身体に交わり、その中に浸透し、身体においてあることが彼の生存の様式であるとして両者の関係が疑われないのに反して、分裂病質者は精神と身体とのあいだに隙間があると感ずる、精神はどのような程度にか不本意に、理不尽に身体に繋ぎとめられているとする落ちつき悪さをもってそこにどままっている。

（二五五〜二五六頁）

神田・石川両氏が「見られる自己と見る自己」二つの意識の矛盾に苦しんだ式部は、その一つを「身」、今一つを「心」とよんだのであるうか（前掲著、一六三〜一六四頁）と一般論ふうにまとめたのに対して、上の引文は「矛盾」と一言でかたづけられてしまう内容を、より詳しく明かしているではないか。本稿冒頭に挙げた、有名な「身」と「心」の歌を『紫式部集』からもう一度確認のために引いておこう。

55 かずならぬころに身をばまかせねど身にしがふは心なりけり

56 ころだにいかなる身にかかなふらむおもひしれどもおもひしられず

「身」と「心」の対は、「引用」としての漢籍の他にも『万葉』以来の、そしてさらに西行の「心なき身にもあはれは知られけり……」のころときへ流れ下る和歌の伝統があった。『紫式部集』のそれは、内実はともかく、形態的には和歌の伝統を継承した例に列せられるべきであるが、先人たちの歌とは位相を異にすること、同じ関係構造が『源氏物語』にも見出せることは野村精一氏が既に指摘するところであった（前掲「身」と「心」の相克―劈かれたる存在について『國文學』二三巻九号、一九七八・三）。そこで氏が『源氏物語』から引くのは御法の巻の一節、

今さらにわが世の末にかたくなしき心弱きまどひにて、世の中をな
ん背きにけると、流れとどまらん名をおぼしつむになん、身を心
にまかせぬ嘆きをさへうち添へ給ひける。(小学館・全集、(4)五〇〇頁)
紫の上没後、弔問客があいつくなかで悲嘆にくれる光源氏の心中に入り
込んだ地の文が、野村氏の指摘のとおり『集』と合致すること、当該部
分がいわゆる〈六条院の述懐〉⁹⁾に直接接続することなど、物語作品内
の本文という留保点を考慮に入れるにしても、紫式部の思い入れに想到
せざるをえない。しかし、野村氏は「ここだけを切り取っても、右の関
係構造のすべてを説き尽くすことはできない」ともいう。光源氏が思い
通りにならぬもどかしさをいう「身」といい、出家の意志を指すとおぼ
しき「心」といい、より抽象化された『集』のそれとは、表現の一致と
はうらはらに、相当な落差があるのではあるまいか。『集』歌の「身」
と「心」がまさしくおのれの心象を語っているためであろう。

上田氏は「b-2」に続けて、

〔c〕

……精神にとって身体がその属性であるように見えるのは単なる見
せかけか、あるいは精神の倨傲の生む錯覚にすぎない。精神にとっ
て身体は、属性であるよりはむしろ所与である。精神が身体を統べ
るといってもそれは部分においてそうだとし、全体にお
いて——その精神の統べる部分をも含めて——身体の方が精神を包
み、精神を支えているのである。

普通の人間にとって、体験的にか、あるいは慣習によってか、か
くべつ疑問とすることなく受容されているこのような身体化された
精神のありようは、分裂病質者にとっては許しがたいことと思われ
る。

(一五七頁)

と説く。たしかに、レインのように「身体化された自己」(embodied

self)、「身体化されない自己」(unembodied self)という時、「自己」
を「精神」に置き換えた方が本稿には都合がよい。特に右の二つめの段
落——「身体化された精神のありようは、分裂病質者にとっては許しが
たいことと思われる」という一般論は、たちまち『集』の歌を喚起させ
ずにはおかないだろう。ここでは右に引いたのに譲り、みたび引用した
い衝動にかりうじて堪えることとする。

さて、右の文脈をへてレインは分裂病質者における「身体」と「自己
(精神)」の関係を次のように解説する。

〔d〕

人が自己と他者のあいだのすべての相互関係を、彼の存在の中に
ある、しかし〈彼でない〉体系に委託すれば、世界は非現実として
体験され、この体系に属するものはすべて、いつわりであり、無益
であり、無意味であると感ぜられる。

人はだれでも一度ならず、ある程度においてなら、そのような：
気分にとらわれるが、分裂病質者ではこうした気分が、特に強い。
こうした気分は、知覚の扉あるいは行動の門が自己の支配下になく
て、にせ自己によって生きられ操作されているという事実から生じ
る。…このにせ自己は〈真の〉自己から、部分的に分離した一体系
であって、それゆえ、他者や世界との間に人がもつ関連に直接関与
することからは除外されている。かくて偽—二元性がその人の存在
の中で体験されることになる。…これは次のように図式的に表され
る。

(自己／身体)∥他者

のかわりに状況は

自己∥(身体—他者)

となるのである。

だから、この自己は、実在の事物や実在の人間との間に直接の関係をもちつことをさまたげられる。…… (一〇五―一〇七頁)

図式にくだくだしい解説を付する必要があるまい。前者は、「自己」(精神)と「身体」は折り合いをつけてひとりの人物となって他者と対峙しているさまを示しているし、後者の図式にある、他者にゆだねてしまった「身体」と肉体をうしなした「自己」(精神)の乖離は、まさに「身」と「心」の二元論である。本稿冒頭にあげた『日記』引用文①に、

おもふことのなめなる身ならましかば、…つねなき世をもすぐしてまし、……たゞ思ひかけたりし心のひくかたのみつよくて、ものうく、おもはずに、なげかしきことのまさるぞ、いとくるしき。

とあるのも、「身」の処遇が不如意であること、「心」に先導される者の苦しさをいうのであって、それは、引用②の、

身のありさまのゆめのやうにおもひつゞけられて……

と「身体」への疎隔感をいうのとも、引用④の、

心すごうもてなす身ぞ……

とあるのとも重なり合う。この事実と発見は、レインの文を長々と引くゆえんでもある。

例によって、上田氏はこれに敷衍して、

〔d-2〕

精神↕(身体―他者)

この赤裸の精神の眺めは私を寒くする。ここでの精神は外界から孤立し、自己の身体からも孤立して、ある例では孤影悄然として、またある例では孤高の誇らしさをもって、といったさまざまにニュアンスをみせながら、要するに精神は、そこで絶望をいだいて孤絶しているのである。 (一五九頁)

という。これはなんと、紫式部その人についての表現そのものではないか。模型として一般化するにはあまりに生々しい気がする。それは、ひところ(と言うより、今もなお?)彼女の内奥を表現するのに使われた「孤立」「孤高」「絶望」「孤絶」などの語が、このたった数行の引用にふんだんに盛られているからだ。とすれば、皮肉なことに、結論はその「ひところ」に出ているのだろうか。——それに対する答えは当然否定的ならざるをえない。「孤立」「孤高」……など内実を把握せずとも、言葉は言葉として用いることができる。問題なのは、皮相の言葉ころがし・意味ころがしではなく、その精神世界を実体あるものとして分析した結果にこそあるはずなのである。右のレインや上田氏の言説より遡って、スイスの精神科医であったブローラー(Broeiler)が分裂気質者の自閉性を説いて、「敵を持つのではないかという恐怖が、自閉的思考をする人にとっては、敵が現に存在しているという固い確信と同一視される」と指摘したことであった⁶⁾。

四 身を思ひすてぬ心

さらに〔d-2〕に書き継いで、上田三四二氏は次のようにも言う。

〔e〕

もし、この孤絶した精神を積極的に評価する観点があるとすれば、それは次の一点——すなわちそのとき贖の自己たる身体をふりほどいて立つ精神は、みずからを孤絶の場に置くことによって俗にまみれぬ高貴さと自由を確保しようとしている、という一点であろう。……分裂病質者のこのような超越的な傾向は、平俗や日常に対する反指定としての意味をもち、身体に対する精神の優位を宣言しているだろう。…… (一五九―一六〇頁)

これまた紫式部を語るかと思わせる一節であるが、レインを祖述したものの、分裂病質者の型を述べているにすぎない。にもかかわらず、紫式部が、

引用⑤「身を思ひすてぬ心のさもふかう待べきかな」

と嘆息をもらす時、彼女の内部には「身体に対する精神の優位」が認知されていると見なすことができるのであるし、相反する現実がそれを阻んでいる、というふうに読みなすことができるわけである。『日記』冒頭近くの、

引用⑥「うつし心をばひきたがへ」

で中宮彰子の御前に自分がいるというのも、

引用⑦「のこるところなくおもひする身のうき」

というのと同じと考えてさしつかえない。これをさしあたり「身」による現実認識と呼んでおこう。

紫式部は「みずからを孤絶の場に置くことによつて俗にまみれぬ高貴さと自由を確保しようとしている」のであろうか。少なくとも『日記』のそこかしこにそう読み取りうる言致を見ることはできよう。精神病理学の指し示すところにしたがって、いちおう彼女を分裂病質（分裂病そのものと直接関係ないことに注意）の枠の中で把握しておくことは許されるように思える。しかし、その把握自体は神田・石川両氏の繰り返しにすぎず、ほとんど意味を持たない。そう理解したうえで、どのような機制が見出せるかが本稿の立場であった。そしてさらなる問題は、彼女の言致に「身体に対する精神の優位」が示される一方で、「身を思ひすてぬ心」の表現にあらわされるように、かならず慎重な「身」による現実認識が添えられていることなのである。

上田氏はレインに導かれながら「c」の文で「精神にとつて身体がその属性であるように見えるのは…錯覚」という。挑発的なものいいでは

あるが、こうした「精神」と「身体」の関係構造は、ニーチェの有名な『ツァラトストラかく語りき』によつても、

肉体は一つの偉大なる理性である。一つの意義をもつ一つの複数である。一つの戦争であり、平和である。羊の一群であり、一人の羊飼である。

同胞よ、なんじはなんじの卑小なる理性を「精神」と呼ぶが、之、実はなんじの肉体の道具にすぎぬ。なんじの偉大なる理性の瑣小なる道具であり、玩具であるにすぎぬ。

「自我」——となんじは称え、この言葉を誇つている。さあれ、より大なるものは、よしなんじが之を信ぜざらんとするも、——なんじの肉体である。また、その肉体が示す偉大なる理性である。之は自我を称えない。しかし自我を行う。……

（竹山道雄訳、新潮文庫・上巻、五九頁）

と支持されるのである。「精神」と「肉体（＝身体）」と並べた時、われわれは「身体」を物質と同列視し、形而上のものとして「精神」の崇高さに思いを致すが、ニーチェは近代人のドグマともいべきこの関係構造をひっくりかえしてみせたのである⁶⁰。木村敏氏はこれに敷衍して、「身体」と「精神」の相克によつて「心身二元論」というありもしない仮構が作り上げられることになる。私たちにとつてなによりも大切なこと、それはこの仮象に幻惑されることなく、生のままの身体の「偉大なる理性」に耳を傾けること（『心の病理を考える』岩波新書、一九九四・一一刊、一五八頁）だと提言する。ただ、こうした二元論を超越する試みもまた近代の所産だということは、あたりまえのことながら確認しておかねばならない。儒教的倫理や仏教的哲学しか持ちあわせのない紫式部の時代において、「身」と「心」の二元論が、おそらくはのがれようのない、選択の余地のない思弁の方法なのであり、この二元論の範疇で彼女は思索するしか

なかった、という史的事実をふまえておかねばならない。しかも注意すべきなのは、「心すごうもてなす身」「身を思ひすてぬ心」などと称して、二元論の中の身動きのとりにくさを、すでに彼女は彼女なりのことばで表出していたことなのである。

『日記』消息文末尾の「かく世の人ごとうへをおもひく、はてにとぢめ侍れば、身を思ひすてぬ心のさもふかう侍べきかな。なせんとにか侍らん」とは、藤井高尚・清水宣昭『釈』に「ひたぶるに、我身をすてたらしましかば、世の人ごとうへを、とかくいふべくもあらざらましを、猶、かやうにいへるは、身を思ひすてぬ云々」として以後、「この世を思ひ捨てぬ私の未練な心」(阿部『評註・全釈』)、「わが身に執着する心」(池田・秋山『大系』)、「わが身を思ひきれない気持」(中野『全集』)など、諸注ほぼ同様に繰り返すばかりであったが、萩谷『全注釈』が「遁世」を留保する紫式部の心像を想定し、「彼女は、テーゼに対して無限にアンチテーゼを思いつく性質で、究極的に止揚すべき所を知らないからである」と指摘したことは、「身」と「心」の二元論のうちにしか思索の場をあたえられなかった彼女の自己分析のゆくえを評したのに近い。「身」を憂きものと貶めたとしても、「心」は「身」に従属するほかない(「身にしたがふは心なりけり」という)「身」による現実認識の矛盾。その事実を思いきわめたと思つた瞬間にもそれに納得しない自分がある(「おもひしれどもおもひしられず」という撞着。——われわれが『紫式部日記』『紫式部集』を読む時、こうした循環論法にでくわすことになる。その循環論法の迷路を脱け出るためには、「身」と「心」がまさに対として向き合う用語という認識の是非にまでたち戻らなければならぬ、というのが論理の必然であろう。

またもや上田三四二氏の文章を引けば、こういうことだ。——
身体には精神の意のままにならない広大な領域のあること、……そ

のこの系として、身体は精神の関与なくして生命現象を保つことができるという事実がある。……ともあれ、精神と身体は分かちがたく結びついている。ただその結びつきが硬直的、短絡的な因果律による結びつきでないために、その間に隙間があるように見え、また事実そこには一種の「あそび」が認められるが、「あそび」は乖離のしるしではない。かえって、その結びつきの精妙化の証しである。精神が身体を出自としつつなお精神の独自さを自由として感じることができるのは、この結びつきにおける精妙な仕組のためであり、分裂気質はこの仕組みの精妙さの解法をあやまって、「あそび」の部分に緩みの生じた例と言えるだろう。(前掲著、一七三頁)

「e」を承けて、「精神」を「身体」の一部と見なす論とひとつづきの一節である。

紫式部がいうように、形而上世界に超然としてあるべき「心」がどうしても「身を思ひすて」ることができぬとすれば、右に述べきたつたように、「身」と「心」とは対関係では破綻が生じざるをえない。しかし、対幻想などという概念の存在しない時代である。「身にしたがふは心なりけり」と喝破した人物が「身」と「心」の二元論に終始したのは、選択の余地のない自己分析の方法であったと同時に、ひき裂かれた自己をもつ人たち——「あそび」の部分に緩みの生じた例——にとつて「身」と「心」の二元論は、自己の相似形をなして、はなはだ都合のよい論法であったからに他なるまい。右の上田氏の説くような二元論を超越する思弁は近代の所産だと前述したが、「身」と「心」の対語でしかおのれを語るすべのない紫式部に、むしろ二元論を超越する存在としての評価をあたえることができるのではないだろうか。もとより、右は管見のおよぶ範囲での、共時的模型による紫式部の「心」の復顔像でしかない。紫式部という人物の全体像の解明をめざしたものでないこと、

いままさら詳述するまでもあるまい。

「身」と「心」をキーワードとして操るとそれだけでなにやら論をなしたような気になるものだ。しかしこの両者が対となりえないものであることが明らかになりつつあるのが現在の精神病理学的、哲学的状況である。今後、われわれもこの二元論を超えたところで紫式部論を試みてゆかねばならないだろう。

注

- (1) 伊井春樹氏「引用」論からみた源氏物語」(『国文学解釈と鑑賞』一九八一・五初出、『研究講座源氏物語の視界1——准拠と引用』新典社、一九九四・四刊、所収、一三頁)
- (2) 池田和臣氏「源氏物語夕霧巻の引用論的解析——反復・変奏の方法、あるいは「身にかふ」夕霧」(『研究講座源氏物語の視界1——准拠と引用』所収、三六四頁)
- (3) 阿部秋生氏「六条院の述懐」(『東京大学教養学部紀要』一九六六・一二〜一九七二・五初出、『光源氏論——発心と出家』東京大学出版会、一九八九・八刊、所収)
- (4) シルヴァーノ・アリエティ『精神分裂病の心理』(加藤正明・河村高信・小坂英世共訳、牧書店、一九五八・一二刊、一七頁)
- (5) デカルトは、いったん「精神」と「身体」の二元に分割したのち両者をもう一度接合して考えたらしいが、ニーチェはそれに対するアンチ・テーゼを示していたのであろう。これについても上田氏前掲『うつしみ——この内なる自然』参照。廣松渉氏『身心問題』(青土社、一九九四・五刊)が表題について諸家の論を紹介している。

付記

本稿の成るにあたって、精神病理学の入門的知識と参考文献については藤原恒広氏(千葉県松戸市高塚団地診療所)、原稿整理については一九九四年度卒業生の出山陽子さんにそれぞれお世話になった。記して謝意を表したい。